

NHK アカデミア 第19回<彫刻家 外尾悦郎>

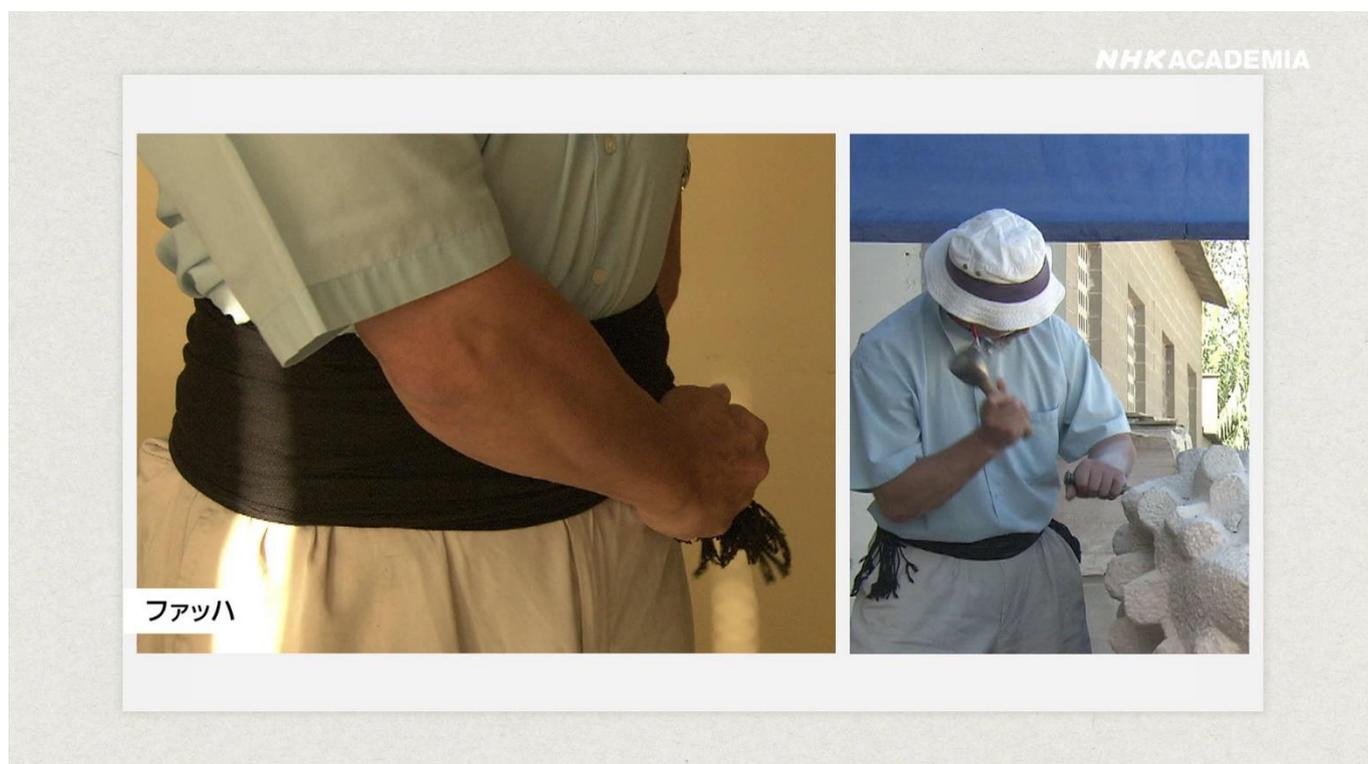


外尾悦郎：彫刻家。25歳で単身スペインへ。以来45年間、世界遺産「サグラダ・ファミリア」の装飾・彫刻を作り続けてきた。現在「サグラダ・ファミリア」芸術工房監督として活動。

こんばんは、彫刻家の外尾悦郎です。「彫刻家」というよりも「石彫り」と言った方がいいかもしれません。石を彫ったり、彫刻をしたりしている家族や友達を持っている人というのは、そんなに多くないかもしれない。石を彫るというのは、だいたい屋外です。場所をそんなに移動できないので、夏の暑いときに、日がバンバン当たっていたり、冬は寒風吹きすさぶところで彫ったりしているんですけども、「石を彫る」ということはそれを超えた強い魅力があります。「自分と石との対話」というようなものなんです。



石を彫って割っているみたいですが、本当は石にノックしているんです。ノックしながら「進んでもいいか？」と聞いているんですよ。だから、石と僕との対話。それが私の45年間でした。



石を彫りながら腰に巻いているのが「ファツハ」というものです。スペインのカタルーニャ地方にはいろんな発明品があるんですけども、これがとてもいいんです。食事をするときも、一日中これをつけていて、何にも負担にならないんです。でも、重いものを持つときや仕事をきゅっとするとき、“補助”をしてくれる。とてもいいシンプルな発明品です。

私の人生の大半は「サグラダ・ファミリア」という教会をつくるところにあります。私は彫刻家として紹介されましたが、今、サグラダ・ファミリアでは芸術工房監督として活動しています。いろんな石を彫るだけではなくて、タイルを置いたり、デザインをしたり、あらゆる仕事をするものですから、今は芸術工房監督というふうになっています。若い人たちがどんどん入ってきていますから、少しずつ私はオブザーバーのような仕事に移っています。



サグラダファミリアは、スペインの大きな町・バルセロナにあります。人口は100万人以上の、周りを含めると300万人ぐらいになりますよね。日本と比べると雨が少ない。年間300日が晴れの、非常に地中海らしい都市です。そのど真ん中に、アントニ・ガウディが2代目の建築家として、サグラダ・ファミリアを作り始めました。



サグラダ・ファミリア



サグラダ・ファミリア

今日は短い時間ですけれども、このサグラダ・ファミリアの珍しい形、なぜこんな不思議な構造をしているのかということも面白いんですが、そのいくつかの扉の向こうにあるものを、ぜひ皆さんと共有したい。なぜこれを作り続ける必要があるのか。そして現在1日に2万5000人が訪ねてきているんですが、なぜこんなに世界中の人たちがここに興味を持つのか。教会であれば、世界中にあるわけですから。ここだけは、宗教などは関係がないような…異教徒の人にも来ますよね。それから、特に若い人たちが何かを探して来られる。そういう方が大半だと思います。



サグラダ・ファミリア



サグラダ・ファミリア

アントニ・ガウディという人は、1852年6月25日に生まれて、73歳まで生きました。なぜ100年を超えてもサグラダ・ファミリアはつくり続けられているのか。なぜ彼を求めているのか。彼に何かミステリアスな大きな魅力があるのではないかと確信を持っている人が、どうしてこれだけ世界中にいるのか。彼は全く本も書いていないんです。だけれども“彼の込めた思い”というのが、今も伝わっている。

アントニ・ガウディ



Gaudi Reserch Center

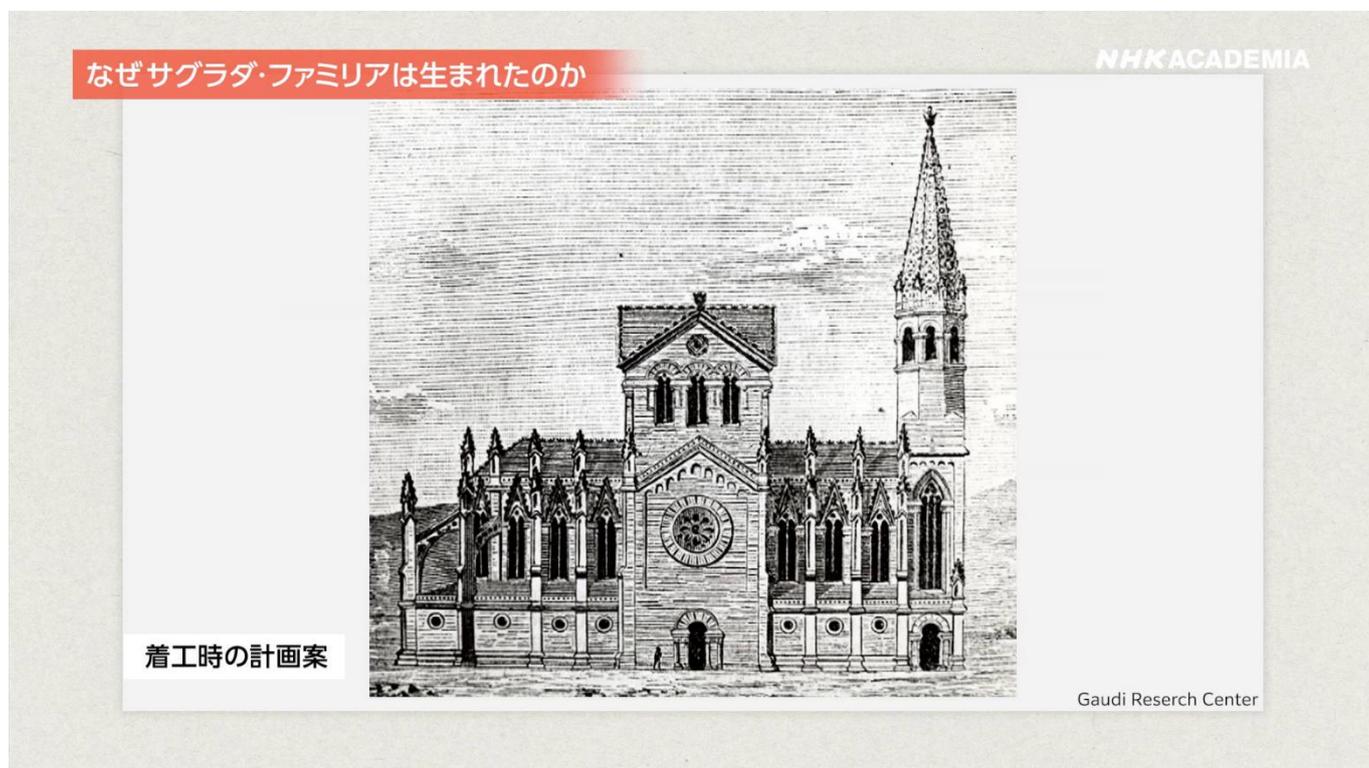
ぜひとも、間近で学んできた私に質問してください。もし皆さんと共有できるものがあったら本当にうれしいです。そして、私は45年間、異国の地で日本人としてやってきたんですけれども、おそらく若い人たちも今日聞いておられると思いますから、これからの皆さんのお役に立てればと思います。日本人として、そこでどうやって生き抜いてこられたのか、ぜひ皆さんとともにお話ししたいと思います。

<なぜサグラダ・ファミリアは生まれたのか>



まずはサグラダ・ファミリアの始まりと言うんでしょうか・・・100年前に、おそらく21世紀の我々に、多くの、でも何かわからない、でも何か“確かな魅力があるもの”を作り始めた。その状況を簡単にご説明したいと思います。

100年ちょっと前に、産業革命というものが起こりました。これは“動力”の革命ですね。人力や動物を使っていた動力というものが、蒸気や電気など革命的な変革が起こりました。それを真っ先に手に入れた人、それを利用できた人は、ばく大な富を得たんです。その変革のときに、お金持ちと貧しい人の差が出てきて、本当に少数のお金持ちからたくさんの労働者がお金を得て生活していた。格差がある社会で、貧しい労働者の中には、心のよりどころを求める人がたくさんいました。人生というのはいろんなことに出会います。生きていけば生きていくほど、重い荷物を背負わなければいけない。人生の重みに耐えなければいけない。そこでなぜ教会が必要なのか。神様というのは、私が思うに、人生の重みを半減してくれる、もしくは3分の1にしてくれる。人生の苦しみを和らげてくれると、当時の人も考えたのではないのでしょうか。そのために、貧しい中からお金を集めあって教会を建てよう、自分の苦しみを半分にしてくれる“神の家”を作ろう。それが、サグラダ・ファミリアです。



私が45年間、仕事をしていた間の大半は、サグラダ・ファミリアというのは全く有名ではありませんでした。作り始めた頃というのは、誰もそんなに、サグラダ・ファミリアがどうなるのかというのはわからない。ただ、神の家を作りたいと望む人が、50万人以上いたんですね。そこで抜てきされたのが、私は1978年から仕事をしています、ちょうどその100年前の1878年に建築家の資格を取ったばかりの若いガウディです。2代目の建築家として仕事が始まりました。



ガウディが構想した完成予想図

©The Gaudí Research Institute Collection

<天才建築家 アントニ・ガウディ>



天才建築家 アントニ・ガウディ

その発想が
どうしてできたのか？

このユニークな世界に2つとない、サグラダ・ファミリアを作り続けていく。その発想がどうしてできたのか。ガウディはどのようにして天才になれたのか。なぜこれだけ、彼が亡くなったあとも世界中の人を魅了するのか。そここのところも少しだけお話ししたいと思います。

ガウディは1852年に生まれたんですけれども、その2年前の1850年、ガウディ家は二人の幼い子どもを同時に亡くしているんです。その悲しみの中から2年後に、もう一人子どもが生まれてくるわけです。勇気で、これは。2年前に二人の子どもを亡くした悲しみからまだ立ち直ってない中で、生まれてきた子どもに何を望めるでしょう。「お金持ちになってほしい」とか、「いっぱい仕事をしてほしい」と思うのではなくて、「できれば長生きしてほしい」。小さいときに亡くなった子どもたちのことを思い出したくはないけれども、そうであってほしくはないと思うだけだったでしょう。ところが、ガウディは小児リウマチという病気を生まれたときから持っていました。親としては、家族としては、もう学校なんか行かなくていい、勉強なんかしなくていい、ただ生き延びてほしいということで、ガウディは家で療養を続けるわけです。学校というものをほとんど知らない。だから友達もいないんですよ。幸い、ちょっと郊外に住んでいましたから、その自然の中でガウディは育っていくわけです。



天才建築家 アントニ・ガウディ

トカゲ

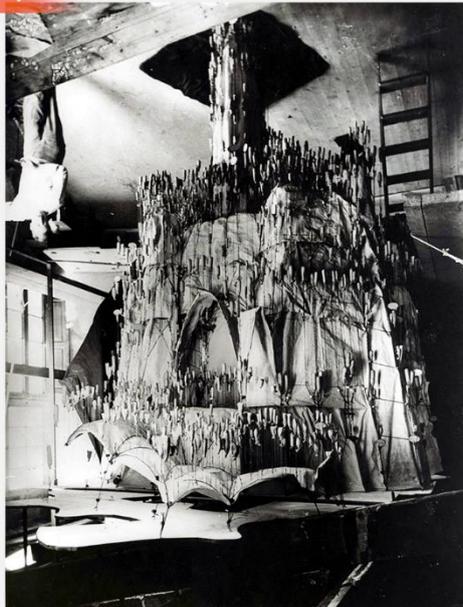
自分はなぜ体がいつも痛いのか。遠くを見ると子どもたちが走っているけれど、なぜ自分は走れないのか。なぜみんなと話ができないのか。そういうことがわからないながら、一人痛みを苦しみながら、いすや庭の石に座って過ごしていました。すると、トカゲが出てきたり、チョウが飛んできたり、季節が変わったり、芽が出てきたり、花が咲いたり・・・することがないですから、じっと見ていると、不思議なきれいなものに出会うわけです。小さいガウディが気づいたかどうか知らないですけども、家の中で寝ているときも痛みを感じるんですけども、そういう小さな動物や自然を見ているときには痛みを不思議と忘れていた。薬以上に効く自然の恵み、それを無意識のうちにガウディは感じたのではないかと思うんですね。学ぶというよりも、自分の痛みを忘れさせてくれる小さな動物、自然の動き、その美しさに、ガウディはひかれていったんでしょう。だから、ガウディが天才になれたのは、自然を観察するところに自然と引きずり込まれていったからだと思います。



逆さづり実験(フニクラ)

©Foundation Junta Constructora del Temple Expiatori de la Sagrada Família

これは「逆さづり実験(フニクラ)」といいます。私も大学のときにいろんな模型を作りました。これは床に穴が開いて、右の方に人が立っていますけれども、引力に逆らわずに、どうしたら建物を建てられるんだろうと考えて行なった実験です。晩年に近い頃です。何千年という建築家の歴史の中で、唯一、重力に逆らわずに建物を建てようとした建築家なんですけれども、引力に逆らわないということをフルに生かしたかったガウディは、素直に自然から学ぼう、自然の言うことを聞こう、そうすれば最高の構造体ができるんじゃないかということで、つり下げたわけです。



模型を回転させると
アーチが生まれる

逆さづり実験(フニクラ)

©Foundation Junta Constructora del Temple Expiatori de la Sagrada Família

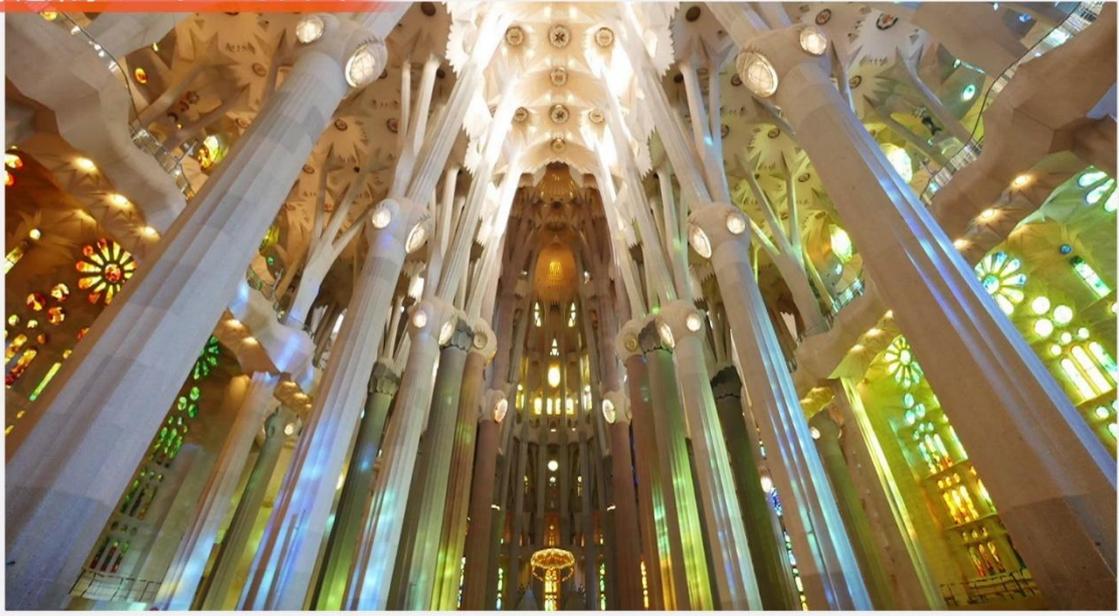
引力が引っ張った糸というのは、実際の建築では石ですから、上下をひっくり返すと、圧力に強い丈夫な構造

だと考えたわけですね。どこの点を取っても、引力が素直に答えを出している。「自然というのは、すべてなんだ」という信念があったから、これを見つけだしたのだらうと思います。

今、我々は自然を大事にしようとか、自然の言うことを聞かないと我々は生きていけないということを言いますよね。だけれども、木は引力に逆らって立っているじゃないか・・・そういうのをつぶさに観察していたガウディは、そこから秘密を探しだそう、そのミステリーを解明しようと、生涯を費やしたんだと思います。



サグラダ・ファミリアの柱はすべて傾いています。一見まっすぐ立っているように見えますけれども、全部、いくぶん傾いているんです。全体を見れば、先ほどの引力に逆らわない糸でつり下げたアーチ型のものを、ひっくり返して逆さまに柱を立てているんですね。



ガウディは、いつか大建築家になったときに、もしも教会をつくることを頼まれたら、森のような教会を作ろうと、ずっと決めていたと思います。なぜならば、そこが自分の一番居心地のいいところだったからです。

<ガウディの思いを読み解く>

ガウディは自分が生きているうちにサグラダ・ファミリアが全部できるとは思っていなかったもので、ポイント、ポイントをつくり上げたんですね。唯一、内部空間、サグラダ・ファミリアのひな形になるようなものを、残してくれたんですね。そこが私の最初の一番大好きな仕事場でした。そこの修復を任されたんですが、とても大きなメッセージをもらいました。それは、石の彫り方「こんなものがこうやってできていたんだ」とか、資料が全くないようなものを「自分で考えていかなくてもいけないという過程」を、そこで学びました。

ガウディの思いを読み解く



内戦で破壊される前の
「ロザリオの間」

Archivo Zerkowitz

通常「ロザリオの間」と言われていますけれども、ガウディの遺言が詰まっているところです。これがスペイン内戦ですべて破壊され、そのあと 50 年間、封印されていました。

ガウディの思いを読み解く



©IAAH. Foto Mas

ところがここに、唯一の内部空間をガウディが作っていたんです。サグラダ・ファミリアの大事なもの、特にガウディの図面などが、ここに密封されていました。エジプトのお墓のように。ところが、中が空洞であるということがわかって、大事なもの、貴金属が当然盗まれ、ガウディの図面もそこで全部焼かれたんです。つまり、ロザリオの間の彫刻たちが破壊されただけではなくて、ガウディの資料、ガウディの考えが詰まったところ、ガウディの遺言のようなメッセージがのせられた図面も焼かれ、すべてがここで失われました。

ガウディの思いを読み解く

内戦で破壊された 「青年と悪魔」の像

©Duardé, Pep

教会というのは大体聖書にあるもの、例えば聖人などから題材に取り出すんですけども、ここは非常に現代的というか、まさしくガウディが生きていた当時の大事件が組み込まれているんです。実際に爆弾が投げ込まれて、多くの方が亡くなった“爆弾のテロ騒ぎ”です。その事件をガウディは目の当たりにしただけではなくて、彼が愛した友人の家族も多く亡くなったんですね。ガウディという人は、小さい頃から非常に繊細な人生を送っていましたが、非常に気の強いと言いますか、怒るときには強く怒ってしまう人だったんです。そこに“怒り”を込めるのではなくて、こんなことが二度とあってはいけないという“祈り”を込めたんです。

ガウディの思いを読み解く

悪魔の誘惑に苦しむ表情を掘った

テロリストのサンチャゴという人が、実際に投げ込んで殺したんです。捕まったあとも、ニタニタと笑っているような青年だったんですけども、それをあたかも投げなかった、あたかも投げる直前、本当は投げてしまったんですけども、投げる前にもしもマリア様に彼がたずねてくれたら、こんなことは起こらなかっただろうということで、私は修復する際に、「悪魔の誘惑に苦しむ表情」を彫りました。



悪魔がオルシーニという爆弾を「さあ、とれ」と。お前はこの爆弾を取って投げる権利があるんだというわけですね。彼はアナーキストですから、この社会を全部壊せという自分の使命感で、実際に殺人を起こしてしまったんです。

「人というのは、何かを信じ切ったときに悪魔がやってくる。そういうものではないか」。それが、ガウディが言いたかったことではないかと、私は感じたわけです。人は何かを見つけたときに、これは正義なんだとってしまう。その人にとっては正義かもしれないけれども、もしかしたら他の人から見たらそれは正義ではないかもしれない。たまたま信じ切ったときに、これはチャンスだと悪魔がやってきて、こいつの信じているものを使って、さあ世の中を壊してしまおうじゃないか、こっちに導こうじゃないか。そう思っている彫刻が、ここにあるわけです。

この青年も、この社会を変えなくてはならない、自分の家族は貧しくて、お金持ちはたくさんいるんだから、彼らを殺してしまえということで、お金持ちが集まる場所で爆弾を投げてしまったんです。「信じるということの怖さ。そのときに悪魔が来るかもしれないということを忘れてはいけないよ」ということを、ガウディは恐らく言いたかったんでしょう。

そういった激しい歴史を持ったカタルーニャで生きていたガウディだからこそ、憎しみやその状況だけを彫刻にするのではなくて、永遠のメッセージ、人間が学んでほしいことを込めたんだと思います。

ガウディの思いを読み解く



あるとき、もうガウディの資料が全くない仕事を任されたんです。さて、どうしよう。本当に資料のかけらでもいいから出てきてくださいと思うんだけど、ないのはわかっている。そのとき私は、真っ暗闇のどん底に落とし込まれたような気分になって、僕は仕事ができないから帰ろうと思って荷物を作りました。でもちょっと待て。ガウディは、どんなにお願いしても僕の方を見てくれない。僕を助けてくれない。だとしたら、ガウディはほかの方を向いているんだろう？そっちを、ちょっと僕も見ようと思ったんです。彼の立っているところに立とうとした瞬間に、十何年仕事をしてきて、手を伸ばせば触れそうなんだけれど触れない、下を見ると深い谷があると感じていたガウディとの距離がすっとなくなって、ガウディが僕の中に入ってきて、僕もガウディの中に入ったような感触があったんです。ガウディが見ている方向を見ようと思った瞬間に、すっとひとつになれたような気がした。それから本当に楽になりました。

ガウディの思いを読み解く



皆さん、信じてもらえるかどうかわからないけれども、全く資料もないサグラダ・ファミリアでの仕事というのは、例えば「ここにこういう仕事がある。大きさは4.5メートル。50メートルの高さ、80メートルの高さに、ちょっとシンボルを考えてくれよ」。これだけなんです。まず材料以前に、そのテーマ、これを作ろうというものが、考えても考えても出てこないはずのものが、「多分、こんな仕事がこのあの場所だよ」と、瞬間にひらめくんです。答えはこれだと思ってしまうんです。

なぜそれが浮かぶのかわからないんだけど、浮かんだあとに、本当にそれが正しいのかなということを誰にも聞けない。誰に聞くのか。自分に聞くんです。自分に問い続けて問い続けて、わかりやすい言葉で言うと、自分をいじめるんです。とことん自分をいじめぬく。いじめぬくというのは自虐的になるわけではないんですよ。「本当にお前大丈夫か」ということを自分に聞くんです。「問題解決したのか」と、問題を自分に問いかけるということです。自分に問いかけた答えを自分が出せなかったら、それはおかしいじゃないかと自分で納得せざるをえないんですが、自問自答するうちに答えが出てくるんです。そうやって、最初に浮かんだ答えを煮詰めて煮詰めて、自分との葛藤でどんどん深くいくと、もう質問はないだろうとなる。そうなったときに、それをつくっていくんです。

そして不思議なことに、つくったあとに情報が入って、これが正しかったという資料が出てくるんですよ。聖書の中のこれとこれを煮詰めていくと、こういう答えがあるから、これは正しい。「正しいね」と言ってくれる人がいるんです。私の幸運なのかもしれませんが、僕はガウディと一緒に見るんだと決めた瞬間から、ガウディが常に助けてくれているような気がします。

ガウディの思いを読み解く



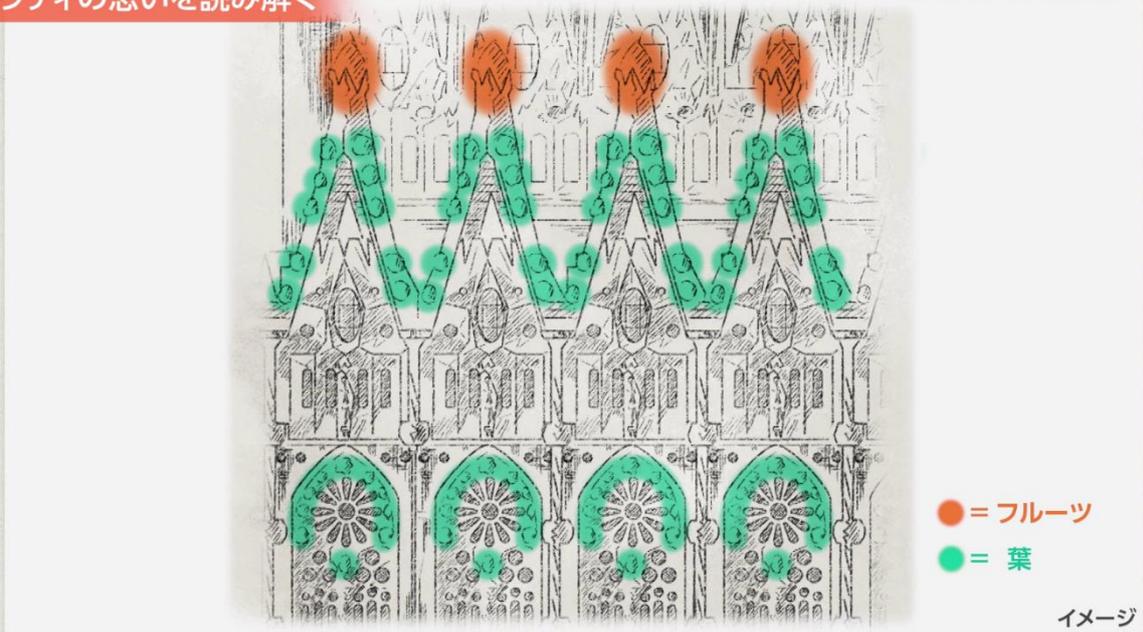
サグラダ・ファミリアで、屋根の上に果実を置いてくれと言われました。それはガウディの模型があったんですが、ガウディが亡くなったあとの模型だったので、フルーツだということはわかるんですが、「これはガウディじゃないな・・・ガウディじゃないけれども、一応指示はあっているな」という模型でした。「じゃあ、ガウディだったらどうしただろう？」と考えるんですが、その前に「なぜガウディはここにフルーツを置くんだろう」と思いました。

ガウディの思いを読み解く



よく聞くと、すぐ下には葉っぱだけが置かれているんですね。そして、もっと下には葉っぱと実と一緒に置かれている。

ガウディの思いを読み解く



こういったものがなぜ置かれるのかという意味を、ガウディの弟子の人たちは多分ご存知だろうと思って、当たり前のように聞いたんです。でも、「知らない」「わからない」ということで、誰に聞いてもわからない。ガウディは本も書いていませんし、何にもわからない。ガウディ研究者のホアン・バセゴダさんに聞いてもわからない。これは自分で考えないとしかたないです。なぜならば、つくるのは僕ですから。大体、「フルーツを作れ」と言うんだから、簡単に作ればいいんですよ。普通に作りましょうと。でもその意味がわからないと、僕は作れないんです。一生懸命考えました。

ひとつ思いついたのは、この教会の屋根の上にフルーツがたくさんあって、大窓の全部に果実と葉っぱが一緒の部分と分かれた部分がある。ここに何か秘密があるんじゃないかと思ったんです。25メートルの高さのところまでは、果実と葉っぱが一緒になったシンボルが置かれている。大窓の周りです。屋根に近づいていくと、屋根の上に葉っぱだけが置かれて、その頂上に果実が置かれている。

二つの方向から行くと、「教会」ということと「自然」ということ。これが一番大きなテーマです。教会では何がされるのか。ミサです。そのミサでは、必ずイエスの言葉が語られるわけですね。そして、ガウディと離してはいけない自然。自然では、果実がなるときには葉っぱが必要です。葉っぱがなくて実がなることはないし、熟すことは決してない。



そこで、本来教会の仕事である「言葉」を伝えること、その言葉というものを書いてみると、日本人であれば「言う」「葉」と書きます。これは世界でも珍しい。「言葉」を表す単語というのは世界中にありますけれども、自然の「葉っぱ」を「言う」と合わせて、「言葉」というのは日本文化だけではないでしょうか。だから、こうやって私は、言葉を皆さんにお伝えしていますけれども、見えない葉っぱを、皆さんに送り届けようとしているんです。今、一生懸命、つたない私の言葉でしゃべっているのは、私の心から出てくる生きた言葉でなければ伝わらない。では、ガウディはその日本語を知っていたのか。知っているはずがないです。いつかは日本に来たいと思っていたでしょうけれども、ガウディは日本語を知らない。だけれども日本人と同じように、自然をよしとして、そこに信頼を置いて、畏敬の念を持って学んだ人なんです。日本文化と一緒になんです。だから答えは一緒なんです。魂を実らせるために教会で語られる言葉。それを自然の果実に託して、葉っぱがたくさんないといけないよ。それは、しっかりとした根とつながっている新鮮な葉っぱで、太陽の光を浴びて栄養を果実に届ける。イエスの言葉は神を通して伝わった。聴いた人間の魂が豊かになる。その二つがひとつになったわけです。これは、ガウディ研究者も誰も言っていないことでした。でもそれで私は納得して、何百という果実と葉っぱを作りました。

ガウディの思いを読み解く



ガウディの思いを読み解く



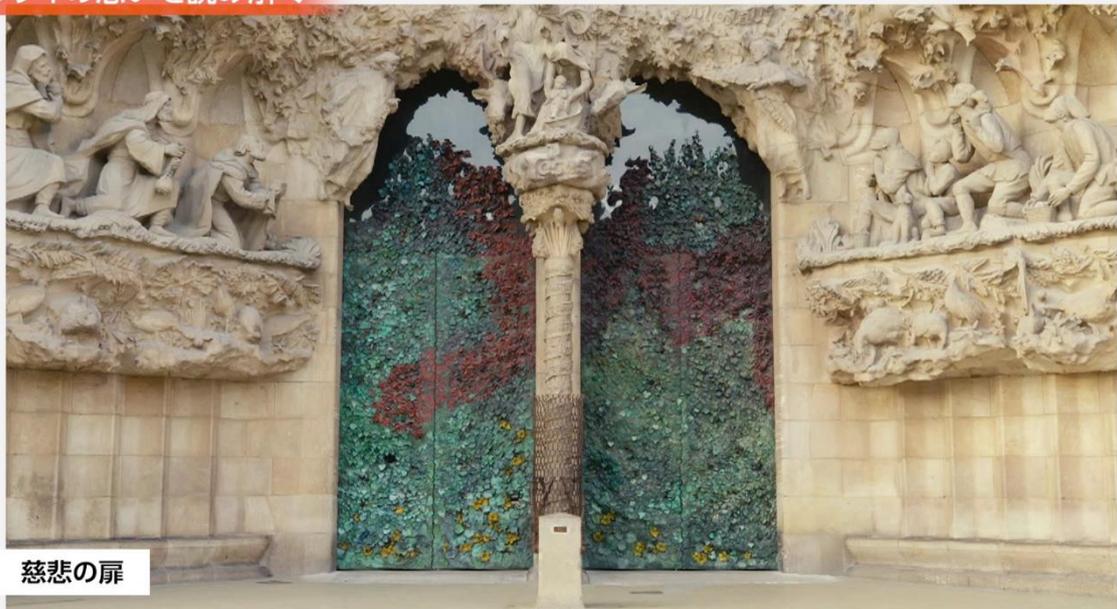
上の方の果実は3.5メートルのベネチアングラスでつくりました。下の方の葉っぱは、1トンの石、御影石です。1トンの御影石を僕は5日で彫るんです。月曜日に持ってきた石を金曜日には仕上げ、サグラダ・ファミリアに送り込む。そうしないと工事がストップしてしまうんですよ。そうしてガウディの思いを込めた葉っぱと果実をつくったわけです。

生誕のファサード



「生誕のファサード」の扉をデザインしろということで、これもコンクールだったんですが、作らせてもらうことになりました。自然と教会というものをひとつにすれば、答えは出てくるんです。ところが、ほかのコンクールの参加者たちというのは、サグラダ・ファミリアというのはヨセフとマリアとイエスの聖なる家族を表しているの、そういうレリーフをいっぱい作るんですね。マリアとヨセフとイエスをデザインした、実体的な、そういう扉を作ればいいじゃないかという発想だろうと思うんですが、私の中には“自然”というものからかけ離れてはいけないというガウディの信念がありました。

慈悲の扉



ここは「慈悲の扉」ですけれども、慈悲とは何か。自然の中から何を選んだらいいのかということを考えるわ

けです。慈悲の意味を深く考えた人はほとんどいないと思います。なぜならば、もう聖書に書いてある言葉だからです。でも、それは自分の言葉ではない。自分の中から、自分の根っことして生まれ出てきた言葉ではない。僕は、自分の根っこから引っ張り出した“慈悲”という言葉、自然というモチーフを使って表現しないとイケない。慈悲とは何か。我々は生きてると、華のある人、きれいな人、有名な人、美しい人生を歩く人、そういうものにひかれてしまいますけれども、そういった華のない人というのが必ずいます。華のない人に目を向ける。これが慈悲です。ですから、自然の中で華のない植物、ツタの葉っぱを選びました。



あと、もうひとつ皆さんに伝えたいことがあります。ガウディはこの建物をつくっていく上で、自然ということのほか、必ず新しい、本当に合理的なつくり方をしているんです。僕もそういうつくり方をしないとイケないんです。

彫刻というのは、原型を粘土で作って、型を取って、そして型にまた石こうを流し込んで、出てくるものが初めて原型になるわけです。それから石に変えたり、ブロンズに変えたりする。このプロセスは何千年の間、変えられないものでした。ところが私はそこで、原型をつくるちょっと飛ばそうと、型をつくるちょっと飛ばそうと、つまり最初からひな型を作ろうとするわけです。例えば、人間の顔を作るときに、鼻をへこませないとイケない。出ているものを全部へこませていかないとイケない。それがひな型です。とても難しいんです。頭の中をひっくり返さないとイケない。それは、彫刻の経験をした人であればあるほど難しい。そこで、経験のない人を使って、そうしてくれと言ってみたら、素直にやってもらえた。つまり、いろんなプロセスで、今までなかったものを、ガウディがやったように合理的にやる。それは、今、技術があるからこうしないとイケないよというのではなくて、もっといい方法があるはずだということを考えるということ。これもガウディが見ていた方向です。ぜひ、この本当の意味の合理性というものも、皆さんにこれから考えてほしいと思います。

<Q&A パート①>

Q. 「ガウディと同じ方向を見る」とは？



はるばらさん「“合理性”と“自然”という話があったかと思うんですが、ガウディが生きた時代と私たちが生きている今、科学が進んで、より合理的な方法が生まれていたり、自然の見方も変わってきていると思うんですけども、外尾さんがガウディになって考えるというか、ガウディの方向を向いて考えるとき、ガウディの時代にガウディが向いた方向を見ているのか、今ガウディが生きていたらこういう方向を見ているだろうというふうに見ていらっしゃるのか。どの目線のガウディなんだろうというのが気になりまして、教えていただけたらうれしいです」

外尾さん「とてもいい質問ですね。ガウディは確かに 100 年前の人でした。ところが、ガウディがその時間の中を過ぎていこうとしていた方向と、今 100 年という時間の物理的な違いがあっても、我々が行こうという方向というのは、もしかしたらものすごい違いかもしれないけれども、同じかもしれない。私はガウディの方向に戻って合理性を考えるというよりも、ガウディはここからもっと違う有効な合理性を持っていた。ただ、我々はそれに気づいていないだけなんだと思うんですね。これに気づかないままずっと行ってしまうと、とても無駄な時間を我々は通り抜けていくことになる。

今、我々はコンピューターがありますから 3D(3 次元)でやります。線を引いて紙の上で描いたものを、立体にしようとする。建築というのは、2次元を3次元にするから、四角いのが一番便利ですよ。 “合理的”とそこから考える。でもそれは、そこに落とし込まれているんじゃないかと思う。そうでないといけないという方法に、習慣づいてしまっているのではないか。ガウディがそれをしなかったというだけのことです。

つまり、あっちに行こうとするのであれば、今ある方法ではなくて、向こうに行く方法はどうしたらいいのか。そこから考えるわけです。今我々は、それは“非合理的”だと思う。今ある方法でやる方が合理的だと思ってしまう。でも、実は違うんです。そこへ本当に行こうと思うのであれば、そこに行くための新しい方法を作る方が、もっと合理的なんです。だから、私は現代を見ていて、なぜこんな非合理的なことばかりをずっと合理性だと言ってやっているんだろうと考えてしまうんです。皆さん、恐らく仕事をされている方だろうと思います

が、どうすればそこに行きつけるのかという方法論を頭の中で組み立てられれば、もう半分仕事は終わったようなものです。プロの仕事というのは、それらをすべて手を抜くことなく緻密に組み上げていって、2段飛ばしなんかしないで1段ずつ、一つ一つ積み上げて、一步一步そこに行き着く。そしてもとに下りてくる。そこまでが仕事です。その方法論というものは、自分で自由にできるはずなんです。それを合理的と呼びたい。つまり、『今ある方法をすべて使うのが合理的だとは限らない』ということですね。僕の答えは、もっとわからなくしちゃったかもしれないね(笑)」



はるばらさん「ありがとうございます。ちょっと難しいお話でもあったんですけど、一直線上に時間というものがあるって、ガウディが過去の方で、その先に自分たちがいるというふうに、やっぱり習慣上考えてしまうんですけど、時間軸というものがたくさんあって、ガウディがいるところもあれば、私たちがガウディのところに行くこともできる、ガウディももしかしたら進んでいるかもしれないし・・・というような感じがしました。私も習慣的に、時間というものを自分としては合理的に考えていましたけれど、そこについてもまた方法があるのかなと思ったりしました」

外尾さん「本当によくわかってきている。我々は21世紀にいるけれども、ガウディは、本当は25世紀までいっているんですよ。少なくとも24世紀までいっているんです。それを皆さんと共有したいんです。ぽんと隣に移りましょう。それが、皆さんが今日ガウディに興味を持っていただいている、最大の果実です」

Q. サグラダ・ファミリアは
ガウディの構想に近づいている？

NHKACADEMIA



みほさん「ガウディのもともとイメージしていたものとは、ちょっと離れていっているんじゃないかなって思っているんですけども、ガウディが当初考えていた建築の形に近づいていると、いい意味で違っていいのですが、近づいているというふうに思われていますか？」

外尾さん「非常に厳しい質問だとお気づきですか(笑)? ガウディの弟子がまだ生きておられるときに、サグラダ・ファミリアを、ほとんど全部セメントでやろうとし始めたんですね。そのときにこんなところでは仕事はできないと思ったので、『僕はもう日本に帰ります』と、トランクに荷物を詰めたんです。僕は石を彫りに行ったわけですから、やめようと思いました。ところが、ガウディの弟子の方から、『ちょっと待て。お前の彫刻は石でやっていい』という答えが返ってきました。でも、それではあまりにもスタンドプレーですよ。僕のやる彫刻だけは石でやって、他はセメントでやる。何かおかしい。でもそれで少し思いとどまって、今に至っています。

ガウディは全部を石でやろうと思っていたのではないかと思うんですが、実はガウディもセメントでやろうとしたんです。実際にセメントで実験をしていました。でも同じセメントでも、そのつくり方に心を込めて、細かいところまでガウディのやり方でやるセメントと、現代のように枠をつくってそこに流し込めばいいんだと、単に流し込む。それを私は実際に見てきて、例えばつなぎ目は、セメントをずっと流し込むわけにいかないんで固めて、その上に枠をつくってまたつないでいくんですが、やはりスペインというのは地中海的で、ゴミとかいろんなものを掃除せずに流し込むので、隙間ができるようなものになっているんですね。つまり、同じ材料を使っても、その仕事の仕方、姿勢というもので、大きく別物になると思います。ですから、私がここで言いたいのは、『たとえ同じ材料であっても、心の込め方によって作業の仕方が変わってくる』と思います。そこに大きな違いがあるということです。

ご質問は、『今のサグラダ・ファミリアはガウディが望んだものですか?』という質問になるとは思いますけれども、1つ、2つ、3つ、4つ・・・今の努力は足りないと思います。でも一生懸命つくっています。今の建築家たちがガウディの構想に沿って、一生懸命ガウディさんの意見を取り入れながら、自分たちのできるものをつく

ろうとしている。それは確かです。



サグラダ・ファミリアは“神の家”です。横にお子さんがいらっしゃいますね。彼の完成を見たい、終わりを見たいと思いますか。そんなことはない。いくつになっても成長する人であってほしいと思います。そしてできれば、この子が社会の役に立つ尊敬される人になってほしい。もっと大切なのは、元気で壊れない人間であってほしいということが望みですよ。この子はお母さんに対して何を望むでしょう。お母さんを喜ばせるために勉強をしたり、プレゼントを持ってきたり・・・でも、本当の望みは元気で楽しく幸せに生きてほしい。

人間は完璧ではありません。完璧ではない有限の人間が、その限度を知ったときに、完璧な神を知るわけです。その神への完璧な家をつくろうとし始める。ガウディも不完全です。その不完全な人間が、もっと不完全な人間たちと一緒にやって、今のサグラダ・ファミリアがある。それでいいのではないのでしょうか。

我々が間違っはいけないのは、神が喜ぶ家をつくる。そのために我々が幸せになろうとすること。『こんないいものができましたよ。さあお取り下さい』というのではない。不完全な人間が、謙虚に一生懸命つくること。そして、我々が幸せにこれをつくり続けることが、神が一番喜ぶことではないでしょうか。ガウディも不完全な人間です。でも優秀な人間です。我々が彼に学んでつくろうとしている。それしかないんですよ。心はひとつでないといけない。彼が謙虚につくろうとした気持ち以上に、我々は謙虚につくり続けたいといけない。だから、形はむしろどうでもいいんです。問題はつくる我々の気持ち。金銭的な裕福を求めるのではない。心から神の家をつくろうとすれば、それでいいんです。あなたのお子さんが、紙でつくったっていいんです。サグラダ・ファミリアは」

<この石が僕を待っていた>

この石が僕を待っていた



プロビデンシア 神意

サグラダ・ファミリアに出会った理由というのを一言で言えば、プロビデンシア(神意)、神のなせる業としか言いようがないんです。ただ、小さいときから大きなものを作りたかった。どんな絵を描いても、紙からはみ出してしまうんですね。昔はそんなに紙がふんだんにあったわけではなくて、きれいな大きな紙を買う余裕もなかった。私の母は偉いなといつも思うんですが、昔はマッチ棒がたくさん入った大きな箱がありましてね、そんなに大きな絵が描きたいんだったら、そのマッチ棒を大広間や部屋の中にひとつずつ置いて、絵を描けばいいと。まだ体が小さい自分が乗れるような、自分が乗ったような気分になれる自動車や飛行機を、広間に描けるわけですね。そうやってマッチ棒を使って絵を描いていました。それでも少し飽きてきて、今度は粘土で立体的に作りたいということで、それも母が偉かったのか“プロ用の油粘土”を買ってきて・・・子ども用の粘土というのは使っていくとどんどん乾いていくので何度も使えないんですが、プロ用の粘土は何度も何度も作り替えることができるんですね、それでよく遊んでいました。



「大きなものって何だろう」と考えると、建築ですよ。だったら、建築家になろうじゃないかと思ったんです。建築家の方向に行こうと思ったときに、建築を学ぶ大学は“ドラフトマン”というか、線の引き方を教える大学でしかないと思って、建築の大学に行く前に“立体”を勉強しようと美術大学に行きました。

幸い京都市立芸術大学に入ったときに、ラグビー部の先輩に彫刻家の方が多くて、立体が好きだったり、迫力があるものを作ったりしておられたんで、何となく私も彫刻科に入ってしまった。当時、彫刻科だけ別棟にあったんですね。大学の本館と彫刻科の間にお墓があって、それを誰かが管理しないといけないということで、大体4年生が給料をもらって夜警のアルバイトをしながら生活するんですが、私は2年生のときからその仕事ももらって、大学の彫刻科の中に住み込んで、昼間はラグビー、夜はそこで彫刻をしてという、非常に優雅なお金をもらいながらやっていました。そういった夢のような4年間が終わって卒業しまして、美術の非常勤講師をしながら将来のことを考えていたんです。

私の場合何をやっても仕事が楽しいんですね。たくさん仕事をして、自動車で次の学校に移動するときに、信号で待っていると、路側帯に石が置かれてあって、その石をふと見たんです。「ああ、これは昔よく彫った御影石だな」と思った瞬間に、後ろからクラクションを鳴らされて…信号が変わっていることすら気づかなかったんです。ほんの数秒だったんだけど、私にとってはすごく長い時間、心を奪われたような、時間感覚がなくなりました。その瞬間からその路側帯の小さな石に、私の心は奪われてしまったんです。どこを歩いても、石を触らずにはいられない。例えば、街を歩いていると、気づくとビルの大理石の表面をなでているんですね。あのときに雑巾か何かを持って大理石の表面をなでていれば、「この人は掃除をしているのかな」と誰も不思議に思わなかったでしょうけれども、手でなめるように見ていたんで、道を通る人たちが「この人大丈夫かしら？」と顔をのぞいてきていました。

そして「これは、まずい」と。自分の精神的な何かが足りなくなってしまった。「これは石が不足しているな」と思ったわけです。皆さんも、体の調子が悪いときに、ビタミンCが足りないな、タンパク質が足りないなどというのがあると思うんですけども、私の場合は「石が足りない」という実感があったんですね。「今おもし

ろい仕事だけれども、非常勤講師を辞めて、石を彫りにどこかへ行こう」と。先生を辞めるんだったら、日本にいらなくてもいいんじゃないかということで、石の文化のたくさんあるヨーロッパへ行こうと思ったわけです。そこにサグラダ・ファミリアがあったということです。



石材の山があって、作っているのか作っていないのかわからないけれども、原石があるということは何かを作ろうとしているんだろう、ほとんど働いている人もいないのでわからなかったんですが、「あの石は僕を待っている。あの石を僕は彫らないといけない」と思ってしまったんです。

でも簡単なことではありませんでした。誰が作っているのか。今みたいに有名だったらすぐに見つかるんですけども、全く有名ではない。ほとんど働いている人もいないような教会だったので、どういうツテでそこで仕事をすればいいのか。「1日だけでもいいから、この小さな石を彫らせてほしい」という願いで責任者を探しました。そうすると試験をするということで…言葉が全くわからないおかげで、彫刻家として雇われることになりました。

<最大の敵は自分>

最大の敵は自分



©Hisao Suzuki

そこから思いもかけない、石との闘いだけではない、人間との闘いというんでしょうか。人間というのは、石よりも重く、石よりも硬い存在なんです。しかも異国で自分がどのようにしてそこで生きていくか。どのように糧を得ていくか。どのように自分の仕事を全うしていくか。そのときは全く想像もできませんでした。

要するに、私が入ろうとしたときに、そこで働きたいという人が、どうも60人ぐらい待っていたらしいんです。「すぐにあいつはやめていくさ」という見方をされていたんでしょう。いろんなプレッシャーというか、はっきり言って“いじめ”みたいなことは、もうしょっちゅうあることです。そのいろんな“試し”というのは、やぶから棒に来るわけですね。そのやぶから棒にやってくる“試されること”に、即座に答えていかないとけない。そのときに「やっぱりお前、これはできないだろう」と思われたら、それでおしまい。「人生は勝負だ」という人たちがいますけれども、負けてもいいんですよ。でも、負けるということはどういうことかという、そのときにその場所での時間は、そこでストップするということです。その人はそこから動けないということです。ほかの時間と空間を見つけられない限り。「負けてもいい」と言ったのは、「ほかのところに行って、もう一度勝負する勇気があれば」ということです。それが嫌だったら、そこで負けては時間と空間がストップしてしまうわけです。

最大の敵は自分



いつも“試される時”なわけですから、そこで打ち勝って行って、初めて仲間に入れる。打ち勝っていきながら、「外尾、あいつに任せるしかないな」と思ってもらえるようにする。それが毎日です。あのときは、こんなに長くいられるとは思っていませんでした。でもなぜこんなに長くここにいられたのかというと、そのときそのときを、恐らくベストで「もうこれで最後になってもいい」という思いでやってきたからだと思います。

最大の敵は自分

NHK ACADEMIA



サンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂(ドゥオーモ)

私は今いろんな教会をつくっています。その中で、皆さんもご存知のフィレンツェのドゥオーモというのがあります。これは700年前からつくり続けられています。つまりこれも“未完の教会”なんです。そこに最大の祭壇があって、祭壇というのは、司教様が座れる司教座といういす、玉座のようなものが後ろにあって、その前

にテーブルがあります。そのテーブルでミサが行われる。その手前に、聖書を置いて、イエスの御言葉を読み上げる「聖書台」というものが必要なんです。今まで 700 年間なかったんです。これ以上待てないから、今、この聖書台を正式につくらないのであれば永遠につくらないぞと、現・枢機卿が決められたんです。それで5年間コンクールをやったんですが、それでも決まらない。みんなが、自分がやりたいということで、そしてそれをバックアップするいろんなグループができた。でも決まらないわけです。「外尾もそこに参加してくれ」ということで呼ばれて参加しました。そして、最後に二人残りました。現在のイタリアを代表するフィレンツェ出身の人なんです。彼と僕が最後の二人で、最終競争をすることになりました。そして、結果的に僕に決まったわけです。



フィレンツェの人たちも、世界中の人たちも、まさかと思いました。東洋人であり、フィレンツェとは縁もゆかりもない外尾という日本人が勝ち取った。あの巨匠を出し抜いて、なぜそんなことが起こるんだ。誰も信じられなかった。私は、現代が陥っている「アートはエゴである」という考えから大きくかけ離れた、ガウディのところで学びました。「芸術とは科学と同じである。真実を求めるひとつの道である」というやり方をずっと信じています。芸術は自分をエゴとして抽出して自分らしいものをということ、どうしても偏ってしまいます。

今、21世紀になりましたが、神を信じる科学者というのは存在しない、してはいけない時代を迎えています。芸術は自分のエゴを出すものだという時代を迎えています。でも、実はそうじゃない。科学者も芸術家も目にもみえないもの、存在しないもの、誰もわからないものを見せてくれます。科学者は、ここに空気がある、その中には酸素や二酸化炭素がある、それらを見せてくれた。芸術家は、今まで誰も気づかなかった形を絵にしたり、いろんなものでこれが真実であるというものを見せてくれる。だから芸術があるんです。

サグラダ・ファミリアのやり方と一緒に。あらゆるものを研究して、そういった資料を全部、寸法もコンセプトもあわせていくと、答えは出るんです。なぜならば、聖書をつくるその聖書台には、イエスが亡くなったあとに言葉だけが残ったんだから、この言葉を聞きなさいという若い天使がいた。ここにイエスの言葉がある

と言って指を差したところには、フィレンツェのアイリス(花)、それを立体的にした花に聖書が置かれるようにつくった。その若い天使が、イエスが亡くなったあとにサバナ(布)だけを置いていった。つまり、私は必要なエッセンスを組み立てただけなんです。寸法、エッセンス、象徴、全部組み合わせただけのものをつくったら、これが選ばれた。

つまり、今までになかっただけであって、なぜ昔からなかったのかと思われるものを、私はつくりたいんです。今見てびっくりした。こんなものができるのか。じゃあ、明日も、明後日も、しあさっても、10年後も来て、見てくれるだろうか。私は見てほしいと思うものをつくりたい。それが私の仕事です。そのためには、自分を最大の敵として・・・敵はいっぱいいます、でも、最大の敵は自分以外にいませんから、自分を問いただし、「本当にお前は大丈夫か」と言いながら、これからも仕事をしていきたいと思っています。

<Q&A パート②>



eri さん「あれだけの芸術作品を、いろんな人たちが作り上げていくというには、ぶつかったりすることもたくさんあるのではないと思うんですが、たくさんの人の意見をひとつにまとめあげていくことで、何か心がけていらっしゃることはありますか」

外尾さん「今のご質問に答える前に、私がなぜ45年間、この仕事が続けられたかをお話ししましょう。『私がずっと日本人であり続けたから』です。私が思うに、その土地の良きもの、悪いものもそうでしょうけれども、多くの場合、外国人によって発見されるんです。つまり、その土地にいと、灯台もと暗しというんでしょうか・・・すばらしいものがあるのに評価されない、ふだんから普通に使っているものが、外国人によって「これはすごいね。日本のこれはすごいものだね」となる。私がスペインのサグラダ・ファミリアで重宝されるのは、『これが大切なんだ』と私が見つけそれを表わしている。つまり、大事なものを忘れない。カタルーニャの人

たちが忘れていたものを、私が教えてあげる。でもそのためには、膨大な努力が必要です。なぜならば、『そんなことがあるかい』という反対意見が大半だからです。でも、それを一人でも守り続けることによって、『ああそうなのか』と、その人たちは気づく。

文化というのは違いがあるんです。違いが消えてしまったら、文化は死んでしまいます。違いというものがあるから、文化は存在しているんです。違う文化であればあるほど、その違う文化が出会ったときに力強い文化が生まれる。その“違う”ということが第一条件であるということがわかった上で、それをひとつにまとめるとき、当然、すりあいどころかぶつかり合いが始まります。それをどうするか、ということですね。でも、そこから始めないといけないんです。『違いがあるから、我々は文化を維持し、新しいものが生まれ、生きていける』。そこから説明して、違いを楽しむしかないじゃないか、それを利用するしかないじゃないかということですよ。『俺が持っているものは自分ではわからないけれども、お前わかるよな？』『ああ、わかるよ。お前の悪いところと良いところ、全部知っているよ』と、本人以上に知っているはずですよ。でもそれを武器にしてはダメですよ。お互いに良いところと悪いところがあるから、力強いチームができるんだろうと思います。ただ、それを口で言ってもなかなか理解してもらえないかもしれません。日々の努力です」



外尾さん「私は、今はトップを退いて、現時点では次の若い世代がコンピューターの世界になっていますから、やっています。私は昔ながらの自分の部屋で粘土を作りながら・・・手仕事で爪の中にいろんなものをはさみながらやっているのは僕ぐらいでしょう。だけれども、ボスというのが気をつけなければいけないのは、『一緒に働いている人たちに、安心感を与えること』。不安を与えるボスは、ボスではないんです。『未来に対する希望を与えられる人』がボスです。働いている人たちがいつも不安に思うことがない、次のステップはどうしたらいいかというのを、事前に準備しておいてあげる。彼らが楽しく自信を持って歩いていける道を、先にいって準備しておく。これがリーダーです。ガウディは職人たちにたくさんの給料を払いませんでした。でも、なぜ100年たった人間たちがガウディを追いかけるのか。それはガウディが“希望”という本当のサラリーを与えたからです。生きていく上で『希望があれば、人間は生きていける』。つまり、希望をふんだんに与えられる人が本当のボスです。もしそういう会社があれば、その会社は放っておいても伸びていきます。働いている

人に、希望と安心感と喜びを与えられるように努力するしかないでしょうね」



ケンジさん「僕は19歳のときに初めてスペインに行って、サグラダ・ファミリアを見ました。そこで言葉を失ったことは今でも覚えていて、それをきっかけとして建築家を目指しています。これから見ていく方々に、外尾さんは何を感じ取ってほしい思われているのか、お聞かせいただけますでしょうか」

外尾さん「次の世代に何を見せたいか。私はガウディが完成する完成しないということは、もう忘れてほしい。それ以上に大きなものがある。我々がものをつくり続けていくこと、それがどんなに大切か。今、我々は完成というまやかしにだまされているんじゃないか・・・というのは、この世に完成したものってあるでしょうか。完成というのは、完成しましたよと言わないとお金がもらえないとか、次のステップにいけないとかあると思うんですけども、人間がつくるもので完成品というのはいないんです。自然の中にもないように。」

我々の目に見えるものというのは限界がありますけれども、どんどん素粒子とかいろんなもの、顕微鏡以上のものがどんどん出てきて、宇宙の遠く果てもどんどんわかってきて・・・新しいものを発見すれば状況が変わります。状況が変われば、価値観も変わる。でも、そういう中でも変わらないものがある。大事にしなければいけないものがある。もしかしたら、あのサグラダ・ファミリアの周りに高速道路がぐるっと回って、その都市高速から宙に浮いた車からサグラダ・ファミリアを見ることになるかもしれない。そうなっても、ここにはすごく価値のあるエッセンスが刻まれているんだという、変わらぬ価値を持ってサグラダ・ファミリアは居続けてほしい。それを何世代たっても築いてほしいと思います」

Q. 次の世代に何を見せたいか?



外尾さん「私的なことで申し訳ないんだけど、私は父親を6歳のときに亡くしてほとんど知りません。もう小学校に入ったときに父親は亡くなりましたけれど、『いってきます』とあいさつして出て、『ただいま』と言って帰ってきて、ほとんど寝ている父親しか知りません。大きくなったあるとき、近所のおじさんだったか親戚だったかに、『お前の親父はな、家の前で血を流してけがしている子どもを、はだして抱えて病院まで連れて行って、そして、その子の家まで連れていったんだぜ。お金を払って』と言われたんです。それだけで父親のイメージは十分なんです。それは1万年前にも行われていたこと。知らない子が血を流していたら、助ける親がいる。そういったものを連綿とこれからも続けていくために、サグラダ・ファミリアは作られている。どんなに状況が変わり、どんなに価値観が変わろうとも、そのシンボルとしてサグラダ・ファミリアはあってほしい」

Q. サグラダ・ファミリアの後に
やりたいことは？

NHKACADEMIA



しょうさん「外尾さんは何を目標にして仕事をされていて、これからどういうふうに過ごされたいのかを聞きたいです」

外尾さん「ありがとう。後ろのサグラダ・ファミリアの模型、いいね」

しょうさん「はい、作りました」

外尾さん「うわあ、すごいなあ。それは宝物ですね」

外尾さん「私はサグラダ・ファミリアに向かった45年という時間の中で、ガウディが終着点だとは思っていません。サグラダ・ファミリアが終着点だとも思っていません。今、私が作っている『イエスの塔』。これは最後の塔です。60メートルがひとつの空間になる世界です。そこの内部デザインを、本当にすべて写真を見せてお教えしたいんだけど、それを構想した瞬間に、ガウディがなぜマリアの塔を後ろに置き、周りに4人の福音史家を置き、受難と生誕の門、そして栄光の門を置いたのか。その構想段階と構想の理由が全部、ぱっとわかりました。イエスの塔が僕にそれを教えてくれたんですね。だからその内部デザインというのは、神がいて、その神の言っていることが全くわからない人間たちに、この世界というものをつくり、その中で重力やいろんな光やいろんなものを我々に与えてくれて、我々は幸せに暮らしている。それでもまだけんかしている。そこに自分の子どものイエスを送り込み、それ以上はできないよと言っている。それがサグラダ・ファミリアなんです。

今までの、何かを探して自分の疑問を解決するために旅を続けてきた一人の旅行者だと考えています。ですから、もしサグラダ・ファミリアが私を必要としないということであれば、喜んでどこかへ、自分の持っている疑問を解決するために向かいます」

Q. 子どもに何を
経験させるとよい？

NHKACADEMIA



るーるーるーさん「3人の男の子の母親をやっています。子どもの頃にやっていた良かったなという経験や思い出があれば、伺いたいなと思いました。いかがでしょうか？」

外尾さん「子どもを今3人育てている。勇気がある、立派なお母さんです」

外尾さん「神様がつくった最初の大切なもの、それは“母親”なんです。神は自分の代わりに母親をつくったわけですね。だから目に見える神は、母親です。子どもたちにとっては。ところが、これも幸いにも、完璧な母親は一人も世界にはおられない。どうやって母親になるかという、子どもが母親にしてくれるわけです。最初から母親はいないし、完璧な母親もない。だから、母親ほど苦しい成長を続けなければいけない存在というのはないんですよ。でも、“完璧な母親”を求めようとしてはむしろいけない。なぜならば、神がそうしているからです。

子どもを育てるときに私が申し上げたいのは、完璧な母親、親はいないわけですから、何ができるかということ、あらゆるチャンスというか、いろんなものに出会わせてほしい。それは経済的に豊かな人がいたら、留学とかいろんなことができるでしょうが、それとは全く違う。例えば、泥遊びでもいい。それをコントロールしながら、あらゆる経験をさせてあげること。買ってくる必要はないです。音楽のバイオリンなのか、縦笛なのか、おもちゃでも何でもいいです。それを子どもが自分で選ぶんです。だから、親として何もしてあげられないと耳にしますが、昔の親はもっと何にもしてあげられることはなかった。“放置状態”ですね。そのなかで、子どもたちが自分で探していく。自分の親を子どもがつくるように、自分の人生もつくっていく。それを自然にやるのが子どもです。放っておけばいいんです。許される範囲で、あらゆるチャンスを与えてあげること。

なぜ、リウマチで学校も行けなかったガウディが、建築家になろうと思ったのか。それはやっぱり自然との接し方、自分で探していたものがあるから。少年時代、まだ建築を学ぶ大学に行こうとする前に、友達と一緒に“廃虚”を冒険したわけですね。その廃虚を見たときに、ガウディは『これをいつか修復して戻したい』と思いました。それがために建築の道を選んだわけです。一緒にいた外交官になった友達は、『ああ、こんなすごい

廃虚があるんだ。世界にもあるだろう』ということで外交官になって世界中の大使となって、いろんな写真を撮ってはガウディに送っていた。同じものを見ても、我々は大人でも子どもでも、ひとつの同じものを見ていないんですよ。この地球上で80億の人がいますが、誰一人として同じ人間はいない。だから、その人が、この短い人生の中で自分の好きなものを見つけられたら、これは幸せです。そして好きなことによって、仕事ができ、その好きなことによって人を喜ばせることができたなら、その人の人生は幸せです。“幸せ”というのはそれしかないんです。

Q. 子どもに何を
経験させるとよい？



“人を**幸せ**にできなければ
自分が**幸せ**にはなれない”

ガウディは一人一人の注文主にあったものをつくり、作り方も全部それぞれ違うものをつくっていた。なぜならば、その人を幸せにするために、建築を彼はつくったんです。小さいときから彼は本当に心から幸せになろうと願っていました。自分が幸せになるためには、『人を幸せにできなければ、自分は幸せにはなれない』ということを知っていた。だから、一つ一つの建築を全部その人に合うようにつくった。最初につくった『ピセンス邸』は、そのオーナーが鳥が大好きだったので、陽のあたる一番いい部屋に“鳥かご”を作った。出来上がったときに、壁面も全部鳥で描いた。どんなにこのオーナーは喜ぶだろうと。オーナーが入ってきた時に「ちょっと待ってください、まだできていないんです」とガウディは言って、走って何かを取りに行き持って来た。それは暖炉の前につり下げる、紙でできているような軽い“鳥”でした。『あなたが冬になって暖炉をたいたときに、その暖炉の暖かい空気で、この鳥は飛びますよ』とガウディは言ったんです。それが建築です。建築を通して人を幸せにしたわけです。それが彼の生き方でした。そういった道が人間にはできるんですよ。なぜならば一人一人違うから。

ぜひ自分のできる範囲で、『こんなものもあるよ、こんなものもあるよ』ということを見せてあげて、子どもが探す、見つける。そしてその中で、人を幸せにしないと自分は幸せにならないというプリンシパル、人間の第1条件だけは教えてあげてください。目上の人を尊敬し、そして嘘をつかないという、人間にとって第1条件を教育されれば、未来は“希望”だらけですよ

るーるーるーさん「ありがとうございます」

外尾さん「自信を持って。子どもたちはおそらくお母さんを一番尊敬していると思います」



皆さんに申し上げたいことは、今、世界がガウディの時代と同じように大きく変わろうとしています。不安だらけだと思います。だけれども、その不安を背負って、背負って、背負ってはいは、なかなか人間はつらい。でも、これを繰り返してきたのが人間です。どこかにそれを解決する道がある。希望を捨てないこと。そしてもっと私が申し上げたいのは、喜びましょう。『どんな不安なときでも、喜びましょう』。そこから発想も変わり、あらゆるものが変わってくる。悲しんでいては、何も始まらない。どんな状況のときも、まずは喜びましょう。そしておいしいものを食べましょう。体のために、いいものを。元気で。皆さんの健康をお祈りします」